

明治大学国際日本学部 山脇ゼミ
群馬合宿報告書（2022年8月）

1. 日時

2022年8月4日(木)～8月5日(金)

2. 参加者

青柳壮真、岡野瑠璃、柳沢未羽、吉留凜（国際日本学部3年）

松野有香（国際日本学研究科修士課程1年）

日暮トモ子（日本大学）、林幹（林幹行政書士事務所）、山脇啓造

3. 視察先

(1) 大泉町

日本定住資料館、大泉町多文化共生コミュニティセンター、大泉町立図書館

(2) 太田市

株式会社アルテソリューション

(3) 伊勢崎市

株式会社DS in Japan、ベトナム屋台料理「私のお店」

(4) 前橋市

群馬県庁

(5) 高崎市

JICA高崎、グローリーハイグレイス有限会社

4. スケジュール

〈2022年8月4日(木)〉

10:19 西小泉駅着

10:30 日本定住資料館

11:15 大泉町多文化共生コミュニティ（大泉町役場、大泉国際交流協会）

12:30 ランチ@PAULISTA、お買い物@SUPER MERCADO TAKARA

14:00 大泉町立図書館

15:20 株式会社アルテソリューション

17:25 太田駅発

17:47 新伊勢崎駅着、株式会社DS in Japan

19:30 ベトナム屋台料理「私のお店」

〈2022年8月5日(金)〉

08:55 伊勢崎駅発
10:00 群馬県庁
12:00 前橋駅発
13:00 ランチ@Gru
14:00 JICA高崎
15:00 グローリーハイグレイス有限会社
16:00 Spectrumの「英語で学童」
17:00 解散



5. 視察先の報告

(1) 日本定住資料館

大泉町の日本定住資料館の最寄駅である西小泉駅は、ブラジルをイメージさせる黄色と緑が配色されており、中国語や韓国語、英語の他にスペイン語やポルトガル語の案内表示もあった。私たちを案内してくださった大泉町の職員の方は、線路を境に、外国にルーツを持つ人が多く暮らす地域や多言語の看板が見られるとおっしゃっていた。



ブラジリアンプラザには、ポルトガル語で書かれた新型コロナウイルスなどに関するポスターやサンバの煌びやかな衣装が飾られており、職員の方も3人程いらっしゃった。

ブラジリアンプラザの中にある日本定住資料館では、30年近く大泉町の外国人住民施策に関わってこられた糸井昌信・大泉町国際交流協会会長にお話を伺っ

た。大泉町に外国人住民が増えたきっかけは、1990年6月の改定入管法施行により日系3世に在留資格「定住」が与えられたことで、日本での就労が可能になったことであった。当時日本はバブル経済期で、特に製造分野の中小企業が人手不足であり、来日した人は直接雇用で雇われることが多かった。その後派遣や大企業でも雇われるようになると、間接雇用が増え、次第に労働環境が悪化していったとのことである。

大泉町では「ガラッパ」という名称のポルトガル語で書かれた広報紙を毎月発行し、以来30年近く生活に役立つ情報を発信している。また、1990年10月には、町の小学校に外国籍の児童が増え、全国に先駆けて日本語学級が成立した。増加する外国人住民に対応できたのは自治体のトップの姿勢が大きいと分かった。30年の間には、日本社会に溶け込めた人とそうでない人で格差があることや、外国人側が交流を望んでいても、日本人側が積極的ではないというミスマッチがあり、日本人側がどうアプローチするかが重要であるとのことだった。

(吉留)

(2) 大泉町多文化共生コミュニティセンター

前半は大泉町役場の多文化共生事業についてお話しいただき、後半は大泉国際交流協会の活動について伺った。

大泉町役場は常にポルトガル語、スペイン語、英語の通訳職員をおいて外国人住民の相談を受け付けている。また防災マニュアルやごみの出し方の案内など、暮らしや命に関わる情報については多言語化して対応している。特徴的な取り組みとしては、「文化の通訳」という日本



の文化や暮らしのマナーを母国語で伝える制度を設けている。登録者は現在630人程いるが、参加者の固定化が課題となっているようだ。また、ブラジル人学校で健康診断を実施したり、外国人住民によるボランティア活動を支援したりなど、他の団体との連携もある。

一方、大泉国際交流協会は、大泉町からの事業費や企業などからの賛助金によって活動するボランティア団体である。主な活動は日本語講座や子どもたちの学習支援で、その他にも、食糧支援、ベトナムやネパールの文化ふれあい講座、スペイン語やポルトガル語講座などを行っている。スペイン語やポルトガル講座は、オンラインではなく対面でできていたときは、最後に南米料理のレストランへ行っていた。このように大泉国際交流協会が、大泉町などが実施していないすき間の事業を実施することで、大泉町の細やかで行き届いた多文化共生社会づくりを支えているといえよう。

(吉留、松野)

(3) 大泉町立図書館

大泉町立図書館は、日本人住民だけでなく外国人住民にも広く利用してもらうためにさまざまな工夫がなされている。例えば、利用案内は日・英・葡の3言語で作成されている。また、図書館2階には、国際ライブラリーコーナーが設置され、ポルトガル語の本を中心に、スペイン語や英語などの外国語の本が約3000点配備されている。その多くは、外国人の子どもたちに母国の言葉や文化を忘れないでほしいという外国人住民などからの寄贈によるものである。現在は、外国語の本が高価であることと選書が困難であるという理由から、新しい外国語の本の購入が困難であるとのことである。

また、毎週土曜日には、日本語や日本文化を学べる「多言語サロン」を開催し、多くの外国人児童・生徒が利用している。さらに、もっと日本語の勉強が必要な児童向けに、毎週水曜日にも同様に開催し、学校入学前のプレスクールのような役割を果たしている。

そのほか、年1回、群馬大学学生による子ども向けのお楽しみ会や、生後7か月の赤ちゃんと保護者向けのブックスタートも、この図書館で開催している。



(松野)

(4) 平野勇パウロさん(株式会社アルテソリューション)

平野さんはブラジル・サンパウロ生まれの日系3世であり、10歳で来日した後、大泉町の小学校に通った。ブラジルに住んでいた時は自分を「日本人」であると思っていたが、日本に来て外国人扱いをされることにショックを受けたそうだ。しかし、小学校の先生が教科書にふりがなを振ってくれたり、ポルトガル語の辞書を全ページコピーしてくれたり、卒業式に色紙を書いてくれたりと、見守ってくれる存在があったことが大きな支えになったという。

その後、高校生になって自分のアイデンティティを見つめなおす経験をした。それは、親戚の集まりで自分のポルトガル語を笑われたことで、ポルトガル語が喋れなくなったという経験である。平野さんは、「日本人」になることに必死で日本について学ぼうとしていたために、ポルトガル語がわからなくなってしまったのだ。そこでポルトガル語を学べる大学がないか調べたところ、京都外国語大学のポルトガル語学科が見つかり、ポルトガル語やブラジル文化の世界に大学入学とともに飛び込んだ。大学では、「パウロ」という名前を隠さずに伸び伸びと過ごし、サンパウロへの留学も経験した。

しかし、大学卒業後に入社した伊勢崎の商社では「パウロ」という名前を隠すことを提案され、「平野勇」という名刺しか用意されなかったため、ショックを受けた。ブラジル人のアイデンティティを表さずに生きてきた。そして、2008年、平野さんにとって大きな転機が訪れた。それは、世界中に経済的打撃を与えたリーマンショックである。その結果、日本のブラジル人のビジネスは、ブラジル人だけでなく日本人も顧客にしないと成り立たなくなり、そうした在日ブラジル人のビジネスをサポートするため、平野さんはデザイン事務所を開業した。2014年にはブラジルでのサッカーW杯もあり、ビジネスは順調に成長した。現在は個人事業から法人に変更し、株式会社アルテソリューションの代表取締役を務めている。



(岡野)

(5) 山本雄次さん (株式会社DS in Japan)

DS in Japanのオフィスを訪ね、山本さんと彼の仕事仲間の菊池さん、森田さんにお話を伺った。山本さんいわく、DS in Japanは、言語があまりできなくても仕事は頑張る人のための受け皿としての機能を果たしているという。主な事業は外国人材派遣や翻訳などである。



技能実習制度がどのように見直されるべきかを伺った。菊池さんは、制度自体は必要だと思うとおっしゃっていた。人々が行きたがらない職種も社会を支える上で必要だからだ。問題なのは政府の取り締まりが甘いことにあるという。技能実習生の過酷な労働条件や理不尽な扱われ方などの問題点は以前から指摘されていたにもかかわらず、政府の対応はもっと早く出来たのではないかとおっしゃっていた。

森田さんは、自身が日本語ができたにもかかわらず日本語学級に入れられてしまった経験から、見た目や使用言語に関わらず皆がフェアに接してもらえるようになればいいという。また、技能実習生を「安い労働者」と見るのをやめてほしいとおっしゃっていた。

山本さんは、制度はなくすべきではないが、例えば、ベトナム人の多くは手先が器用なため、食品加工のような職に適性があるのではないかとおっしゃっていた。

(青柳)

(6) 群馬県庁

①ぐんま外国人総合相談ワンストップセンター

ぐんま外国人総合相談ワンストップセンターは、3階建て洋風建造物である昭和庁舎1階に設置されている、外国人住民向けのワンストップ型相談窓口である。対応言語は、ポルトガル語、スペイン語、英語、ベトナム語、中国語などで、それぞれの言語の通訳が常駐している。ポケットークも常備しているが、電話相談が多いことと、やさしい日本語で対応しきれないケースが多いことから、使用頻度はそれほど高くない。入管職員、弁護士・行政書士や法テラス職員が月1回程度訪れ、専門的な相談に対応している。



②地域創生部ぐんま暮らし・外国人活躍推進課

33階建て県庁の17階にあるぐんま暮らし・外国人活躍推進課では、主に外国人県民の状況と多文化共生のための取組について紹介いただいた。

群馬県には、60,749人(3.1%)の外国人が住んでおり、これは、全国で3番目に高い外国人住民比率である(R3.12末現在)。国籍別では、ブラジル、ベトナム、フィリピンの順に多く、この3か国で全体の約半分を占める。また、市町村別では、伊勢崎市、太田市、大泉町、前橋市、高崎市の順に多く、この5市町で全体の約4分の3を占める。そして、在留資格別では、永住者と定住者が多く、この2つで全体の約半分を占める。



次に、群馬県の主な多文化共生のための取組で注目すべきは、共創の概念も取り入れた、「群馬県多文化共生・共創推進条例」(2021年4月1日施行)である。そのほか、医療通訳ボランティアの養成・派遣、災害時の外国人支援事業、日本語教育ボランティア養成講座、「多文化共創カンパニー認証制度」や「ぐんま多文化共生・共創推進月間」などである。

そのほか、32階の官民共創スペースと動画・放送スタジオ、26階のふれあいテラスにあるジオラマ(群馬県の立体模型)も案内していただいた。

(松野)

(7) 海老原周子さん (JICA高崎)



海老原さんは、これまで出会ってきた海外にルーツを持つ子ども・若者から「友達がない」「相談する相手がない」という言葉を聞き、居場所づくりに取り組んできたという。言語の問題があり、進学に関する情報を集められない、親が大学に行ったことがないため子どもにアドバイスをしたくてもできないといったように、親にも頼ることができない現状に子ども達は直面している。

居場所づくりとして、アートを通じた多文化交流ワークショップに取り組んできた。テーマを決めて写真や映像を撮ったり、ストリートダンスを練習して地域のお祭りに参加したりといったワークショップを通じて、10代、20代前半の若者が集まってきたことを受けて、東京都立一橋高校で放課後に集まってアクティビティを行う場である「多言語交流部(One World)」を作った。最初は3人だったが、20人へと人数も増えていったそうだ。加えて、高校生、高校中退者、高卒で来日した20代の若者を対象とした「Out of School」という実践型インターンシップの活動を行なった。それらの活動から7、8年経って外国ルーツの高校生を支える仕組みが不足していると強く感じ、文科省に「日本語教育が必要な高校生と公立高校生の中退率と進路状況」を調べてもらった。その結果、日本語教育が必要な高校生は公立高校生と比べて「7倍以上の割合で中退」、「進学率は約6割」、「約9倍の確率で非正規就職」、「約3倍の確率で進学も就職もしていない」といったデータが可視化された。義務教育での支援は進んでいるが、高校段階の支援が足りていない、外国人に対するイメージが必ずしも良いわけではないなどの課題を海老原さんは感じていて、都内だけでなく地方でもサポートをしていきたいと考えている。

(柳沢)

(8) 相京恵さん (グローリーハイグレイス有限会社)

グローリーハイグレイス有限会社は2004年に設立され、2016年から外国人材の採用を始めた。30名弱の会社で、外国人従業員の出身はアメリカ、ブラジル、フィリピン、ジンバブエなど多様である。また、2022年現在、群馬県内の五社が多文化共創カンパニーとして認証されており、グローリーハイグレイス有限会社はそのうちの一家である。



原点はイタリアンレストランのGruである。(二日目の昼食はGruを訪れた。) レストランを営みながら外国人のお客さんが多く来るようになり、友達になった。彼らの多くは優秀な大学を卒業して、群馬でALTとして働いていた。「群馬で働くことは好きだけど、職がない」という

彼らの声を聞き、働く場を提供したいと考え、地域で困っている人にサービスや商品を届けたいという思いから世界や多様性、価値観を知る場やネットワークを作ることを決意した。初めはALTとして働いていた外国人を雇ったが、ほとんどが辞めてしまった。理由は主に二つあった。一つ目は、給料の問題である。ALTの給料は月32万5千円であり、高い給与を求めてALTに戻ってしまう人が多かった。二つ目は、ビジネススキルの問題である。大学を卒業して働く経験がないままALTとして働いていた彼らは、ビジネススキルが足りなかった。日本語能力が高いとしても、ビジネススキルがなければ、柔軟な働き方ができない。この反省を活かして、外国人材を採用する際にはビジネススキルや柔軟性に注目している。

通訳、商品のPR動画の作成、外国人観光誘客やアフタースクール「英語で学童」など業務は多岐にわたる。日本人と外国人スタッフがペアになって業務を行っていて、常にお客様のニーズに合わせたサービスを提供することを心がけているようだ。

「英語で学童」

レストランのGruで働いている従業員が「夏休みは学校がない、子どもの面倒を見なくてはならない」「学童は埋まっていて子どもを預けられない」という理由から働くことができず困っている現状があった。共働きの親を応援したいという思いから、小学生を対象にサマースクールにも取り組んでいる。



ルにも取り組んでいる。

今回は、サマースクールの様子を見に行った。講師はグローリーハイグレイスの多国籍な従業員で、サマースクールの時間は8:00～19:00までである。カリキュラムも様々で、英語を学びながら子ども達を楽しめるような工夫がされている。訪れた日の授業は、浴衣の着付け体験だった。

6. 感想

初日の夕食はベトナム屋台村で食べた。ここでは、山本ダック(北京ダック)やバインミー(パン)、フォー(麺)等のご馳走をいただいた。どれも非常に美味しかった。私は主に山本さんとお話しし、刺青/タトゥーをタブー視している、コロナ禍で未だにみんな外でマスクをしている、とりあえず「すみません」という等、日本にしかない文化風習に気づいた。食事を食べたテーブルも、日本にある物ではなく、ベトナムから持ってきたものだった。お店には山本さんのご家族、親戚がいらっしまった。以前、多文化共生論の授業にいらした中村さんもいらっしまった。



た。山本さんとお話する中で、彼はものすごいポジティブ思考の持ち主だということに気が付いた。私は数日後に留学に行くので、このポジティブ思考を見習いたいと思った。

今までのゼミ活動では、多文化共生に関して自ら本で学んだり、イベント等を企画運営していた。今回の合宿は、山協ゼミに入って初めて多文化共生事業を現在進行形でやっている地へ赴く機会であった。したがって、ゼミのテーマである「多文化共生」が社会に広まっていることを肌で実感した。これから私達がさらに多文化共生を世に広めることに貢献できると思うと、ゼミ活動のモチベーションがさらに上がった。

(青柳)

今回の合宿では、群馬県が多文化共生に対する取り組みが全国的に進んでいることに驚いた。もともと、群馬県が外国人住民比率の高さで全国3位を誇っていることやその中で永住者・定住者の割合が高いことを知らず、どの自治体でも行政と現場の取り組みには乖離があるという印象を持っていたため、県・市町・現場間の風通しの良さや当事者に寄り添った様々なサポートを知ったことで、群馬県の印象が変わった。県のぐんま暮らし・外国人活躍推進課や大泉町、現場の方々の連携の強さが印象的であったため、群馬県の取り組みがモデルケースとしてさらに全国に発信されるべきだと感じた。

また、当事者の平野さんのお話も印象的であった。その中でも、「日本では日本人になることに必死だった」、「日本人になることに必死でブラジルのことを忘れてしまった」という言葉が衝撃的であり、「日本人」になることの難しさや2つの国のアイデンティティを保つうえでの苦悩を知ることができた。そのような状況で、小学校の先生という見守ってくれる存在が頑張れる原動力になっていたと伺い、周りの支えがいかに重要であるか知ることができた。平野さんと同じように悩んでいる人がいた場合、自分も相手の背景を理解して寄り添える人になりたいと思った。

二日間という短期間ではあったが、全体的に行政、現場でサポートする人々・当事者など様々な角度から多文化共生への取り組みを学ぶことができ、大変有意義で充実した時間を過ごすことができた。今回の学びをこれからのゼミ活動で活かしていきたい。また、群馬県の事例を参考に日本の多文化共生への取り組みが加速することを期待したい。(岡野)

大泉町立図書館は、他の地域の図書館と比べ外国語の本を多数所蔵していること、外国人児童生徒向けの講座やイベントが充実していることから、外国人住民にとっても利用したくなる図書館であると感じた。しかし、実際の外国人住民比率に比べると外国人利用者の割合は低い

ということだったので、外国人住民にどんな外国語の本を所蔵してほしいかなどのアドバイスをもらい、外国語の本を増やしたり、立ち寄って本を読んだり、勉強したくなったりするような工夫をしていくなどして、日本人住民にとっても外国人住民にとっても、身近な学びの場として大泉町立図書館があり続けていってほしいと思った。

また、群馬県が実施する多文化共創カンパニー認証制度は、認証を受ける企業だけでなく、外国人従業員にも働きやすい職場環境の基準が示され推進されることから外国人従業員にとっても、そして、外国人に対して働きやすい地域であるとアピールができる群馬県にとってもメリットのある制度であり、今後、多くの自治体でも同様の取組がなされていくのではないだろうか。

最後に、多くのゼミ生から、群馬県が、東京都、愛知県に続いて日本で3番目に外国人住民比率が高いこと、そして、多様で先駆的な多文化共生の取組が行政や企業など幅広い領域でなされていることに驚いたという声があった。これは、群馬県に外国人住民が多く住んでいることにあわせて、国籍に関係なくこれからも群馬で共に暮らしていきたいという住民らの思いも大いに影響しており、取組が広まっていく今後、外国人にとって、群馬県はますます住みよい魅力的な地域になっていくのではという可能性を感じた。そして、その多文化共生・共創の流れが群馬に留まらず、群馬から全国に波及していってほしいと思う。

(松野)

今回の合宿で群馬の新しい一面を知った。特に、大泉町ではお店の看板がポルトガル語で書かれている様子や町でも外国人の方々を見かけて、ブラジル人住民が多いことを実感した。防災マニュアルなど多言語化に取り組んでいることも印象的だった。ブラジル住民の立場に立って考えると、大泉町は暮らしやすい町であると感じた。外国人は日本人と関わりたいと思っている人が多いこと、日本人からのアプローチ、外国人のキーパーソンよりも日本人のキーパーソンが必要というお話を聞き、マジョリティ側の意識改革が求められると思った。平野さんが、教科書にふりがなを振ったり、ポルトガル語の辞書のコピーをしてくれたりと学校の先生が熱心に支えてくれたとおっしゃっていたように、支えてくれる人の存在は大きいと思う。

また、海老原さんから高校レベルの支援がまだ足りないという課題があるというお話を聞いて、高校はその後のキャリア形成に関わる重要な時期であり、外国籍の子ども達が増えることが予想される中でサポート体制の見直しを早急にしていくべきだと思った。短期間に様々な方々から貴重なお話を聞くことができ、充実した二日間だった。

(柳沢)

大泉町に到着してすぐに、駅や町の看板などから多文化を感じる事ができた。ブラジリアンプラザと日本定住資料館では、日系外国人の方がどういった経緯で日本にきて暮らすように

なったのかという大まかな流れについて学ぶことができた。「ガラッパ」という情報紙は、単に情報を得られるだけではなく、日本で母国語に触れることのできるものとして大切な心の支えになったのではないかと思った。また、糸井さんのお話の中では、日本人と交流したいと思う外国人住民とそうではない日本人側に温度差があるというお話に、課題を感じた。以前お話を伺った芝園団地での問題でも、若い外国人住民と日本人住民の間には文化の壁と同時に年齢の差があり、異文化の人と『共生』か『共存』のどちらのゴールを望むのかの違いがあることも思い出した。国際交流協会ではお互いを知る機会となる様々なイベントが企画されていることを知ったが、両者にとってニーズがあるような交流を目指し、将来的には日本人側も街を一緒に支えているメンバーとして外国人住民と接し、共に課題解決をしていくような住民同士になれることが理想であると考えた。大泉町役場でのお話からも、通訳を常在させていることなど町全体で外国人住民が困ることなく暮らせるよう注力していることがよく理解できた。国際交流協会で行っている子どもたちへの教育やキャリア支援は、抱える課題が一人一人異なるため、細かいフォローが必要であると思うが、子どもたちにとっては自分に寄り添ってくれる大人の存在は非常に大切になると考えた。職員の方は、大泉町の規模だからこそできることがあるとおっしゃっていたことから、町や学校がより連携し、言葉や日本の環境に困ることがないような町として、他の自治体にもよい影響が及んでほしいと感じた。

2日間を通して、外国人住民を支える方や平野さんや山本さんといった当事者の方など様々な立場の方から直接お話を伺うことができ、複数の角度から町の多文化共生について考えることができた。実際にお会いしたり食文化を体験したりすることで、より身近に、より自分ごととして受けとめることができた。また、普段では関われないような社会人の方と接する機会でもあり、自分の視野や考え方が広まった。

(吉留)

